令和８年度 第２回 学校運営協議会 議事録

１．開催概要

- **会議名**：令和８年度 第２回 学校運営協議会
- **開催形式**：対面開催

２．出席者

【学校側】

- **旗島 校長** ： 全般挨拶
- **相川 副校長** ： 司会進行、協議テーマ進行
- **府川 教頭** ： ICT 指定事業について
- **髙橋 先生** ： 研究広報グループリーダー（総合的な探究の時間、地域連携、探究発表会等）
- **藤目 先生** ： 学習支援グループリーダー（教育課程・学習指導等）
- **畠山 先生** ： 活動支援グループリーダー（学校行事、生徒会、部活動等）
- **小宮山 先生** ： 管理運営グループリーダー（学校管理・運営、避難訓練等）
- **前園 先生** ： 生徒支援グループリーダー（特別指導、SC/SSW 連携、SNS 指導）
- **藤井 先生** ： キャリア支援グループリーダー（基礎学力課題、進路決定状況、クラッシー等）
- **桑田 先生** ： インクルーシブグループリーダー（インクルーシブ教育推進、TT 授業等）

【地域・他校委員】

- **田中 委員** ： 横浜市立日野南中学校長（２年目）
- **大竹 委員** ： 横浜市立日野小学校長（２年目）
- **田代 委員** ： 日野連合町内会会長

３．全体会（開会・中間報告・全体質疑）

（1）開会・自己紹介・校長挨拶

- 相川副校長の司会進行により開会し、今年度着任した教職員および各委員より自己紹介が行われた。大竹委員からは、地域の防災活動に高校生が協力していることへの謝辞と、次年度以降の継続的な連携への期待が述べられた。
- 校長より
  - 書面開催が続いた後の対面実施に対する謝辞が述べられ、第１回協議会（書面）で委員から寄せられた意見を反映した学校評価（中間報告）について説明があった。
  - 今年度からの新たな視点として、県からの指示により「事故・不祥事防止」の項目に「働き方改革」が追加されたことが報告された。具体的には、時間外在校等時間の削減や、部活動の活動日数・時間の縮減に取り組んでいる旨が共有された。
  - SNS の普及に伴う人権侵害の風潮に触れ、本日の協議テーマである「ICT 利活用」とあわせて、「学校教育において人権尊重や思いやりの心をいかに育むか」についても委員から意見・助言を得たいとの問題提起がなされた。

- 埼玉県川越の名物の一つ、さつまいもがあり、江戸時代の焼き芋屋が使ったキャッチコピーで、川越は江戸から十三里離れていることから、「栗（九里）より（四里）うまい＝十三里」という語呂合わせで、さつまいもが栗より美味しいことを表す。

（2）各グループリーダーからの取組報告（学校評価中間報告）および質疑

- **研究広報グループ（髙橋 先生）**
  - 「総合的な探究の時間」を通じた地域理解・交流の推進として、２学年では修学旅行（広島・岡山方面）の事前・事後学習と神奈川との比較研究に取り組んでいるほか、日野特別支援学校との交流会や日野中央公園等の地域清掃、一般社団法人との連携などを実施していることが報告された。
  - 探究活動の成果発表の場を設けており、代表グループは横浜南地区の発表会へ参加する予定である。今後も学校説明会やホームページを通じて学校の取り組みや生徒の活動を地域へ積極的に発信するとともに、地域からの意見を教育活動へ活かしていくことを目指す。
  - **質疑応答**：地域の防災活動に高校生が参加して指導や協力を行うことで、地域の子どもたちだけでなく大人たちの防災意識向上や学びにも大きく貢献しているとの高い評価が寄せられた。総合的な探究の時間合同発表会に参加または取り組みの映像等があれば拝見したいとの要望をいただいた。

- **学習支援グループ（藤目 先生）**
  - ICT 利活用推進校として各グループ代表からなる「ICT プロジェクトチーム」を組織し、アプリや機器の研修を進めている。
  - ロイロノートや視覚的効果の高い Canva の授業活用を進めており、12 月 2 日には外部講師を招いた Canva 研修会を実施予定である。1 人 1 台端末の有効活用を広げるとともに、Classi や Google Classroom を活用した課題配信を通じて家庭学習習慣の定着を図っている。

- **活動支援グループ（畠山 先生）**
  - 学校行事や部活動において生徒が主体的に活動できる工程を準備し、役割を細分化して生徒 1 人 1 人が役割を担うことで、自己肯定感や思いやりの心の醸成を図っていることが報告された。
  - 生徒アンケートによる振り返りの結果、多くの生徒が主体的に活動できたと回答したほか、自分の役割を超えて他者へ協力しようとする意識も見られ始めており、今後は役割同士の横のつながりを意識した指導を進めていく方針が示された。

- **管理運営グループ（小宮山 先生）**
  - 火災・地震・下校訓練を実施しており、11 月 19 日には予告なしの避難訓練を予定している。また、防災意識と環境保全意識の醸成に向け、今年度は生徒フロアの廊下等から障害物をほぼすべて撤去し、広い避難経路を確保した。教員と生徒が一緒に毎週校内清掃を継続しており、今後も長期休業や行事の前後など物が置かれやすい時期に点検を徹底する。
  - **質疑応答**：委員より地域の防災活動に高校生が参加して指導や協力を行うことで、地域の子ど

もたちだけでなく大人たちの防災意識向上や学びにも大きく貢献しているとの高い評価が寄せられた。

- **生徒支援グループ（前園 先生）**
  - 職員会議や各学年の支援担任会議を通じて情報共有の場が増えており、生徒の変化や課題への速やかな対応につながっている。今後もSC（スクールカウンセラー）やSSW（スクールソーシャルワーカー）との連携を密にし、早期対応を行っていく。
  - **質疑応答**：委員より「特別指導」の具体的内容やSNS指導の実態について質問があり、前園先生より、校長・保護者同席での説諭や、事案に応じた3〜5日間の別室指導（課題学習や反省文を通じて内省を深める指導）を行っていること、また小・中学校と同様にSNSをめぐる指導の難しさがあることが共有された。

- **キャリア支援グループ（藤井 先生）**
  - 学習習慣の定着と基礎学力の向上を目的として、ベネッセのClassiやGoogle Classroomを用いた課題配信を実施している。対象教科は国語・英語・数学・理科・社会の５教科で、３単位以上の科目は毎週、２単位の科目は月２回程度の頻度で、１回あたり30分程度の課題を配信しているが、提出状況の二極化（未提出者への指導）が今後の課題となっている。また、進路決定が遅れがちな生徒のキャリア意識を高めるため、年３〜４回程度、大学や専門学校の講師を招いた授業を実施している。
  - **質疑応答**：委員より「上級学校の授業」の具体的内容について質問があり、進路関連業者の協力のもと、神奈川大学などの大学による講義形式の模擬授業や、美容専門学校によるカット実習、自動車学校による実車を用いた体験授業などを校内で実施し、生徒の進路意識向上につながっていることが説明された。

- **インクルーシブグループ（桑田 先生）**
  - **報告**：インクルーシブ教育推進３年目を迎え、特別募集生徒は１年生20名、２年生15名、３年生10名の計45名が各学年に在籍している。学年単位でまとまって生徒を支援する体制が根付きつつあり、TT（ティーム・ティーチング）授業においてもＴ１・Ｔ２の２人でクラス全体をしっかり支援する意識が向上している。また、３年生の進路状況（決定済み生徒のほか、専門学校出願予定、障害者雇用・特例子会社への実習予定、アルバイト継続希望等の生徒４名に対する個別支援）について報告された。
  - **質疑応答：**委員より「特別募集生徒の在籍による生徒双方への変化や良い効果」について質問・意見が出された。学校側からは、部活動や体育祭の応援団に一般生徒と共に参加して高校生活を謳歌している様子や、生徒の秀でた能力を伸ばす取り組みの成果として、家庭科コンクールでの入賞や名古屋大学でのポスターセッション発表への参加が実現したことが共有された。また委員からは「特別支援の視点を取り入れた分かりやすい授業は、結果としてクラス全体の生徒にとっても分かりやすい授業につながる」との見解が示された。

（３）全体質疑（部活動と教員の働き方改革について）

- 委員より部活動の終了時刻と教員の勤務時間について質問があり、部活動の完全下校時刻は 19 時に設定されており、18 時 30 分〜18 時 45 分頃に活動を終えて片付けを行うよう指導していることが説明された。
- これに対し、17 時の勤務時間終了後に 19 時まで指導を行うとそれだけで月 30 時間を超える時間外勤務となり、時間外勤務の上限（月 45 時間）を遵守することの難しさや、一部で月 100 時間を超える実態もあるなど、部活動指導と働き方改革の両立における現場の課題について意見が交わされた

４．分科会（ICT 利活用・人権教育・小中高連携について）

（１）協議の導入と部会編成の確認

- 相川副校長より、本来は「学習キャリア部会」と「地域部会」の 2 部会に分かれる予定であったが、出席委員の構成を踏まえ、全員で合同協議を行う旨が案内された。まず本校の ICT 利活用の現状を共有したうえで、すでに導入・活用が進んでいる小・中学校の実践から高校で活かせる知見や助言を求める形で協議が開始された。

（２）本校における ICT 指定事業と環境整備の現状共有（府川 教頭・学校側）

- 府川教頭より、本校は神奈川県の「ICT 利活用授業研究推進」指定校（県内５校のうちの１校）として２期目・２年目の研究に取り組んでいることが説明された。
- 昨年度の「個別最適な学び」というテーマから、今年度は「協働的な学び」へと研究の軸を発展させ、グループの枠を越えた約 10 名のプロジェクトチームを中心に研究を推進しており、11 月 27 日には県内教員等を対象とした公開研究授業を開催予定であることが共有された。
- 環境面では、全教室への電子黒板および校内 Wi-Fi の整備が完了しており、生徒は全員 1 人 1 台端末（iPad）を購入して授業に活用している現状が示された。あわせて、授業での Canva の活用や、初年度無料枠を活用したロイロノートの試行導入（再来年度の本格導入に向けた検証）を進めていることが報告された。

（３）小・中学校からの実践共有と「協働的な学び」の具体例（田中 委員・大竹 委員）

- **中学校における実践（田中 委員）**
  - 横浜市立中学校では全生徒にロイロノートが導入されており、理科の実験前の仮説立て・実証方法の検討などにおいて「書いて消しやすい」デジタルの特性を活かして思考を整理し、教室のモニターに即時投影して意見交換を行う「協働的な学び」を実践していることが紹介された。
  - 全校道徳（いじめ問題）において各学年・全クラスを Google Meet でリアルタイムに接続し、1 年生から 3 年生までの意見を横断的に共有する取り組みも報告された。
  - 課題の提出管理をロイロノートに集約したことで、未提出や返却物の紛失といったトラブルが

激減し、評価の確実性と教員の業務効率化につながっている点も共有された。

- **小学校における実践（大竹 委員）**
  - 小学校では2年生頃からタイピングを含めロイロノートを日常的に活用しており、従来の「一斉指示・提出」の段階から、現在はスプレッドシートやロイロノート上で社会・国語等の調べ学習のテーマや進捗状況を一覧共有し、児童が同じテーマや異なる視点を持つ仲間を見つけて自ら意見交換に行く「協働的な学び」へと発展させていることが紹介された（児童が自由に移動することで雑談が増えるなど運用の難しさも併せて共有された）。
  - 算数等ではAIドリル（「モノグサ」等）が活用されており、特に特性のある児童が紙よりも高い集中力を発揮する一方、過集中を防ぐため教員が適切に声かけをして画面から離れさせる配慮を行っていることや、体育の跳び箱等で遅延再生アプリを用いて自身のフォームを客観視させる活用法が紹介された。

（4）協議項目①：「デジタルデトックス」と「紙（手書き）」との適切な使い分け

- 小・中学校の実践共有を受け、協議は「ICTをどの場面で使い、どの場面であえて使わないか」という質的な使い分けへと推移した。
- 田中委員より、全員がロイロノートを使えるようになったからこそ、中学校では最近「あえてICTを使わない授業」が増えているという変化が提起され、大竹委員からもICT利用の増加に伴う「デジタルデトックス」の必要性が意識されていることが共有された。
- 高校側からの「どのような基準や教科で紙（手書き）を選択しているのか」との質問に対し、田中委員から、ロイロノートは手軽に入力できる反面、記述する文章が簡易になりがちな傾向があるため、本や紙の資料をじっくり読み込んで思考を深めさせたい場面や、自分の手で丁寧に書き上げることを重視する教科担任の指導方針・単元の山場においては、意図的に紙を選択していることが説明された。
- また、小・中学校でICTを日常的に使いこなしてきた生徒が高校へ進学してくることで、高校での授業展開が以前より格段にスムーズになっている現状が確認された一方、インターネット検索のコピー&ペーストによる調べ学習や今後の生成AIの普及に対し、生徒にどう適切に活用させるかという小・中・高共通の課題認識が深められた。

（5）協議項目②：人権教育・インクルーシブ教育における児童・生徒同士の関わり方

- 続いて相川副校長より、冒頭で校長が提起した「人権教育」へと話題が移され、本校のインクルーシブ教育において、一般生徒と特別募集生徒の距離が縮まる一方で、一部に「どう接してよいか分からない」という戸惑いから生じる言動が見られる現状を踏まえ、小・中学校での配慮や指導について意見が求められた。
- **小学校の視点（大竹 委員）**：小学校では個別支援学級と通常学級の児童が教科や朝の会などで行き来することが日常化しており、年度当初に教員が児童に対して「苦手なこと（大きな音な

ど）や配慮してほしいこと」を具体的に説明することで、「一緒に学ぶことが当たり前」という自然な関係性が築かれていることが共有された（高学年になるにつれ違いを意識し始めるため、その都度丁寧な対話を重ねていることも補足された）。

- **中学校の視点（田中 委員）**：中学校では個別支援学級と通常学級が分かれているため違いが明確である一方、高校のフルインクルーシブに近い環境では、同じ立場で生活するからこそ生徒同士が戸惑いや疑問を抱く難しさがあるとの見解が示された。
- **高校の現状と課題の整理（高校側）**：高校段階では、中学校の個別支援学級出身者だけでなく通常学級出身者も本人の意思で入学してくるため、「周囲に知られたくない・特別扱いされたくない」と望む生徒・保護者から「配慮を明確に求める」家庭まで意向が多様であり、対応が難しいという高校特有の難しさが共有された。

（6）閉会に向けたまとめ（小・中・高の接続と地域からの総括）

- 議論の締めくくりとして、高校側より、小・中学校の段階から身につけておいてほしい力や指導のポイントについて今後も情報交換を継続したい旨が伝えられた。
- 委員からは、児童・生徒の発達段階に応じて課題が複雑化していく中で、小・中・高がそれぞれの取り組みや悩みを共有できたことは非常に有意義であったとの感想が述べられた。また、田代委員（地域委員）からも、現代の子どもたちがデジタル機器や新しい技術を柔軟に使いこなす力の高さに言及しつつ、子どもたちの主体性ややりたいことを大人が見守り後押ししていく大切さが語られた。
- 最後に相川副校長より、次回（第３回学校運営協議会）は令和９年３月に開催予定である旨の事務連絡があり、閉会となった。